3 月第 2 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 3 月 3 日（日）10：30～11：30　受難節第 4 主日礼拝
■説　教：　保科けい子牧師
■聖　書：新約：コリントの信徒への手紙二 1 章 15～22 節（新約 p326）
■説教題：「　わたしたちに証印を押して　」
■讃美歌：297「栄の主イエスの　十字架をあおげば、」
　　575「球根の中には　花が秘められ、」

明日は、3月11日を迎えます。私は、仙台に2007年4月から2016年3月までの9年間、それに続き福島に2016年4月から2022年3月までの6年間、合計15年間を東北で過ごしました。ですから、どうしても2011年3月11日に起きた東日本大震災を忘れることができません。昨年の3月11日は土曜日で次の日の12日が主日礼拝になりました。その時に詳しく大震災を巡る私自身の歩みはお話ししたと思いますので、詳しく繰り返すことは致しません。しかし、少しだけお話しします。13年前の3月11日は金曜日でした。その日、私は午後 2 時から母校の東京神学大学の卒業式に出席し、礼拝堂の壇上におりました。その最中に地震になりました。その時の礼拝堂の幻想的な光景は今でも鮮やかに思い浮かべることができます。式後に最寄りの武蔵境駅へ急ぎましたが、改札口はクローズされ、大きなモニター画面に見慣れた名取川を遡っていく大きな津波の映像が流れていました。まるで、特撮映像のようで現実感がわきませんでした。それから 4 日後の月曜日の夜に、街の表情が一変した仙台に何とか帰り着くことができました。私自身も夫も、この東日本大震災とそれに続く福島原発の事故に出会ったことから、その後の歩みを大きく変えられたと思っています。そして、今回よく思い出してみると、なんと3月12日の土曜日には、立川駅で、以前から会う約束をしていた長男家族と会っていたのです。長男は前日11日の夜に出張先の北京から羽田に帰国し、12日の明け方に何とか立川まで帰宅できたとのことでした。それを考えると、長男は今年で13年以上も立川市錦町に住んでいることが改めて分かりました。立川教会の礼拝には、クリスマスのときに出席したぐらいですが、主なる神様の憐れみの中で立川教会につながってくれることを願っています。

さて、本日の聖書の箇所にまいりましょう。15 節に「このような確信に支えられて、わたしは、もう一度恵みを受けるようにと、まずあなたがたのところへ行く計画を立てました。」とあります。この文章を読みますと、「このような」という表現で直前の段落の文章の内容を受けて書き出されていることが明らかになっています。そこで、本日の箇所を読みながら、なぜ、日本基督教団の聖書日課はこのような区切り方で選んでいるのかと少し考え込んでしまいました。けれども、ある方が次のように解説している文章に出会い、少しだけ納得できるような気がしました。読んで見ます。「人間は些細

なことで人の誠実さを疑うことがあります。パウロはコリント訪問を約束しましたが、コリント教会の事情が変化したこともあって、訪問を延期しました。それに対して、パウロは信用のおけない人間であるということを言う人が現れ、それに対する弁明を書かなければならなくなりました。この箇所は、その問題を取り上げています。」とありました。けれども、使徒パウロは単なる弁解をしようとしませんでした。この問題の本質が神の言葉の真実とパウロの使徒職の真実さにかかわる問題であると判断していたので、自分の行動・書いたもの・語る言葉の真実さ、を理解してもらうことに先ず努める必要があると考えたのです。使徒パウロは、自分自身とその同労者である者たちがどのような思いで歩んできたかを少し前の 12 節で語っています。「わたしたちは世の中で、とりわけあなたがたに対して、人間の知恵によってではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの下に行動してきました。このことは、良心も証しするところで、わたしたちの誇りです。」とあります。パウロは偽使徒や反対者たちから、お前こそ偽使徒ではないかと言われ、様々な非難や中傷を受けて、使徒としての「誇り」をひどく傷つけられていました。しかし、彼は人間としての「誇り」や「名誉」の回復を願っているのではなく、神に認められること、使徒の真実に関わる誇りの問題をコリントの人々に語ろうとしているのです。ですから、パウロが理解してほしいと祈り願うことは、この自分の行動の根底にあること、背後にあって突き動かしている原動力が何であるかを知ってほしいということです。それは、神の真実であり、神の恵みであることにほかなりません。

18 節で「神は真実な方です」とパウロは言います。そして、人間には「然り」と「否」があるかもしれないが、彼と弟子たちが宣べ伝えた、キリストにおいては「然り」だけがあると言うのです。19 節の「この方においては『然り』だけが実現したのです。」とは、神が約束されたことはキリストによってすべて果たされているということでしょう。けれどもここで、少し立ち止まって考えてみると、使徒パウロとコリントの教会で問題となっていたのは、パウロの誠実さです。あなた方のコリント教会を訪問すると堅く誓いながら、いつまで経ってもやって来ないパウロの誠実さが問題とされたのです。それなのに、パウロはその問いには直接には答えようとせず、神の真実であること、神の誠実であることについて語り始めたのです。問題が核心からずれているように感じられます。しかし、20 節では「それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます。」と祈りの言葉が語られています。その祈りに、使徒パウロもコリントの教会の人々も心が一つにつながっていくのではないでしょうか。21 節に「わたしたちとあなたがたとをキリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いでくださったのは、神です。」とあります。神の恵みを受けた者は、その神の恵みに「アーメン」と応答します。それは単なる表面的な言葉だけの応答ではなく、その人の存在そのものが神さまの真実に対するアーメンという応答になるということでしょう。そのような存

在として主なる神様が私たちに油を注いでくださる、言い換えれば、神の子として受け入れてくださっていると語るのです。そして、その保証となるのが 22 節の言葉です。「神はまた、わたしたちに証印を押して、保証としてわたしたちの心に“霊”を与えてくださいました。」とあります。このことはまた、コリントの信徒への手紙二 5 章の 5 節でも「わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは、神です。神は、その保証として“霊”を与えてくださったのです。」と念を押して語られています。今、私たちは受難節を過ごしています、その時に本日の御言葉が与えられたのは、私たちに聖霊の油を注ぎ、証印を押して神のものとし、その保証として心に“霊”を与えてくださったのは、主なる神の独り子である主イエスキリストの十字架による贖いの御業であることを、私たちが心から信じてそれにお応えするようになるためであるかもしれません。私たちは、そのように応答して受難節の日々を過ごしてまいりましょう。